

昭和は遠くなりになり

CMEO 事業部 船木知子

このコラムは2010年2月号よりCMEO事業部長の田村が執筆を担当し、硬軟取り混ぜた話題をご提供して参りました。しかし、連載17回を数え、そろそろ手持ちのネタも尽きてきたようで、先日いきなり代打登板を指示されました。CMEO事業部の船木と申します。頼りないピンチヒッターではありますが、よろしくお願い致します。

ちなみに、来月号では、このコラムにも何度か登場している弊事業部のI君が執筆予定ですので、ご期待下さい。

筆者が社会に出たのは1991年。恐ろしいことに、社会人となって早くも20年が経過しました。入社後ほどなくしてバブルが弾けることになるのですが、就職活動中は空前の売り手市場で、現在の就職活動中の学生さんが聞いたら石を投げつけたくなるに違いない状況でした。ただ、今回の主題はバブル期の就職活動の話ではありません。

1991年といえば平成3年。御世替わりから3年を経たとは言え、社内には「昭和のかほり」がそこに残っていました。考えてみれば少し上の先輩は昭和入社なわけで、社員の大部分は「昭和の人」であったわけです。

一例を挙げると、社内喫煙は何の問題も無し。皆さん、自席でスパスパやってらっしゃいました(なぜか女子社員は事務室内で喫煙禁止であり、吸う人はトイレで吸うという状況でしたが)。一日内勤をした日は、帰る頃には髪や衣服にタバコの匂いがついていました。ドラッグストアにはタバコの匂いのつかないスプレーが売っていました。「髪に匂いがつかないの〜!」というCMソングは、いまだに脳内再生可能です。

また、新入社員は朝早くきて自分の机と先輩の机の拭き掃除をする義務がありました。当時、新卒社員は「総合職」と「一般職」に分かれていましたが、研修期間中(たしか入社後GW前まで研修期間であり、その後、現場へと散っていった)は男女の総合職も女子一般職も、朝は8:30までに入社し机の拭き掃除&吸殻捨て・灰皿掃除などをやったものです。研修後、それは一般職女子新人の仕事となりました。

さらに、一般職女子には朝と夕方のお茶出し(お客様ではなく、社員へのお茶出し。緑茶、コーヒーなど、一人一人の好みを把握し在席者に配る)もあったっけ……。

Yano E Plusの読者の皆様のうち、あるジェネレーションの方々には懐かしい記憶ではないでしょうか。若い方々には理解できない習慣でしょう。

その後、バブル崩壊後の不況、その他もろもろの事情による業務効率化、人員削減やグローバル化の流れの中で、上記のような雑用は社員の仕事ではなくなりました。女性社員に『だけ』奥さんやお母さんがするようなサービスを要求するような風潮も影を潜め、同一業務、同一待遇という極当たり前の事が実現しました。個人的に非常に喜ばしいことです。

当時、外資系や一部最先端(?)の業界では「フラットな組織」ということが言われ始めていたのかもしれませんが、筆者が籍を置いていた業界は、組織内のヒエラルキーが比較的しっかりとしていました。その中で若者は怒られ、叱られ、指導され、あちこちぶつかりながら、「会社人(社会人とはちょっと違う)」として形作られてきたように思います。そしてまた、自分の下に後輩が入ると、今度は指導役にまわったりして。指導の内容はバラエティーに富んでいて、納得できるものもあれば、「なに言ってるの?この人」というようなものもあったものです。中にはいまだに承服しかねる叱責もあります。理不尽に怒られた恨みって、忘れないものなのよね・・・。

かと思えば、その当時は全く受け入れることができず、反発した事であっても、20年経って思えばしみじみありがたいと思うこともあります。バブル期に学生生活を送り、さして苦勞もせず社会にでた若造達を、よくぞ辛抱強く指導してくださったものだなあ、と、20年越しの感謝の念を西の方角に送ります(当時私は大阪在住でした)。

そんな私が社会人としてのスタートを切った会社は、数年前に外資に吸収されています。私は5年半ほど奉職して矢野経済研究所に入ったのですが、それはまた別の話。

さて、年寄りの思い出話を書き連ねてきましたが、矢野経済研究所は業務の性格からか、フレキシブルな企業文化を持っているように感じます。新しい発想、柔軟なものの見方は硬直した習慣や考え方からは生まれてこないし、いろいろな垣根を越えたチャレンジをしていくためには、障害はできるだけないほうが良いですね。フラットでフレキシブルなカルチャー(何故私が書くと古臭く響くんだろう・・・)の中で、多彩な人材がのびのびと能力を発揮するというのが、平成も23年を過ぎた現在のスタイルなのでしょう。

でも・・・。紅顔の新人時代から20年。すっかり厚くなった顔皮と、かつてはガラス製だったはずなのに、いつの間にか毛のはえた心臓とともに、昭和の職場がふと懐かしくなる瞬間があります(だったら戻れと言われれば、全力で拒否するんですけどね!)

執筆者略歴：船木知子

1997年、(株)矢野経済研究所入社。プラスチックを中心とした素材及びその加工製品市場に関して一貫して調査研究を実施。材料という観点から、フィルム及びその加工品(各種加工フィルム)、エレクトロニクス部材・材料、容器・包装等の分野で調査実績を持つ。